瀧口と横笛とを等分に見て冷笑して去る

二の漁夫。（初めて眼さめ人々を見て驚く。一の漁夫に向ひ）もう一體何時頃だらう。

一の漁夫。月か西の山の端に懸つたので丑滿時にまもあるまい。

二の漁夫。徐々歸らうか。

一の漁夫。否々歸る前にた前の命は置いて行かねばなるまい。

二の漁夫。何と。（不解の表情宜しく）

是の時山麓より草叢にかれて俄に惡寒の兵の寄する足跡鏘然たる金物の相觸れ鳴る響。叫聲。一の小僧兩手を組んで冥想し瀧口は横笛に手を與へ横笛は瀧口を注視す。笑いかすか也。一の漁夫は焚火の跡に首を垂れたるまゝ。二の漁夫驚き走り出さんとして。

幕。　（五月十日稿）

磯

精樹

瀧一は叔母が出して呉れた義叔父の浴衣をひつかけて、ぶら〳〵と磯へ向つて出かけた。おさげにした根元を大きなリボンでくゝつた豐ちやんと芳ちやんとが手を引かれてついて行く。義叔父の氣質を受けついで大樣な子である。久しぶりに昨日やつて來た瀧一に、すぐなついて、繪をかいて頂戴と今日は朝からねだつた。そう〳〵てどう〳〵二三枚なすらせた。今もしやちこばつた浴衣姿がをか〳〵いと二人で笑ひかはしてつい

て行く。入り殘つた日影が後から義叔父の家の松を射通して淡く照らして居る。散々に膏汗を搾り取られた晝間の太陽とは別物ぢやないかと思はれる程光がうすい、浴衣のしやんとしたのは子供心にもせい〳〵して見ねて、樂しげに唱歌を歌ひながらずんずん歩いて行く。田舍町だけに古びた軒下から瀧一の姿をキヨロ〳〵して見送る。豐ちやん達に丁寧に腰をかゞめる婆さんもあつた。

二町ばかりの所なのですぐ磯へ出た。風が凪いで珍らしう鏡のやうである。日はもう入つてしまつたので、海は一面銀鼠色に靜まりかへつて居る。瀧一は久しぶりに來たのでなつかしい思がする。白い砂は踏むとざく〳〵ときしむやうな音がしてその跡には水が少し出て居る。豐ちやんも芳ちやんも、もう歌はやめて小走りに先へ行く。そして貝殼を拾つたり小さな蟹を追つたりして居る。

瀧一は胸がすつきりしたやうでじつと海を見て立ちどまつた。風は少しもない、何の音もしない。夕ぐれの海岸は實に靜かなものである。

しかし瀧一はその靜かなのが何だか不安心のやうで、物寂しい、怖しいやうな氣がして來た。瀧一は昨日まで紅塵の巷にせつせと揉まれて居て、考へる餘裕もなかつたのが、急に暇になつたので何を考へたらよいのだらうとまづそれがわからないのである。ぼんやり立つて海ばかり見つめて居ると、だん〳〵だん〳〵海面が高くなつて來て、しまひには眼と同じ高さになつたのでハツと思つた。こりやいかん、頭がどうかしてると急に歩を起した。豐ちやんも芳ちやんも、もう大分むかうに行つてる。そのさきの方は陸が一寸つき出て居て、ごつ〳〵した岩間に觀音樣が祭つてある。海はこの觀音岩の根を洗つてずつと入り込んで來て居る。瀧一はぼんやりして考へるともなしに歩いた。

その内に豊ちやんたちに追ひついた。二人とも少さな奇麗な貝殻を集めて居る。貝は波に揉まれぬいてもとの形はさつぱりわからない。

「芳ちやん、そんなに拾つてどうするの」

と聞かれて、無心に拾つてた顔を一寸あげて、

「あたし、まゝ事のお皿にするのよ」

と圓い愛くるしい眼をあげた。

姉の豊ちやんもまだ飯事なんかすると見ねて、

大事そうに手に一ぱい拾つてる。瀧一はハンケチを出して豊ちやんにやつた。芳ちやんも駈け寄つて一しよにそれに包んだ。しかし間違ひのない樣にと曰つて數を數へて、芳ちやんのは十二よと豊ちやんが曰つた。二人は手の砂を落しに下駄ながら海に入つた。

「温いね、お湯のやうだわ」

と二人とも面白そうにちやぽ〳〵いはせて居る。

「濡れるからもうお上り」

と瀧一は退屈さうに云つた。二人とも笑ひ興じて上つて來た。

海が少し暗くなつて、涼しい風がすつと胸に入る。波がザブッ〳〵と音して、岸のところでは小さな砂がチラ〳〵とゆれる。觀音樣にはお燈火があがつて、こんもりした松の間から水に寫つてキラ〳〵と涼しう輝く。

瀧一は急に去年の夏あの堂で月を見ながら西瓜を割つた時の事を思ひ出した。あの時は愉快だつた。肺尖加答兒も大抵治つて、瀧一は近い中に上京するといふので、暇乞ひ旁々叔母の家に泊りに來たのであつた。義叔父は朝鮮に組合の用事で出かけて不在だつたけれど、義叔父の姉が――早くから後家であつた――丁度一家ひつくるめて避暑に來て居て賑やかだつた。觀音樣に蓆を敷かせて叔母達は叔母達で話す、瀧一は仙次君や房子さんと――義叔父の姉の子――一緒に、豐ちやんや芳ちやんの相手になつて愉快に遊びながら、一日井戸につるして冷やした西瓜を割り、蚊が居ないので好いと言つて覺ねず更かしたのであつた。今年はもう仙次君は高等工業を出て滿州に行つて居る。房子さんはまだ海老茶の袴もぬがないで小谷の墓地に眠つてしまつた。

瀧一は懷かしい思がぞく〳〵と胸にせまつて堂に行つて見ねば氣がすまぬやうになつた。豐ちやん等はもう歸りたい樣子であつたのを、一寸行つて見やうと無理に引つぱつてその方へ歩んだ。

風が出てあたりの松のひよろ〳〵と妙にくねつたのに當つて凉しい音を傳へる、浴衣の袖がひら〳〵とかへる。

瀧一は歩を早めた。あの堂には何だか自分をひきつける或者があるやうな氣がしてならない。

危うげな岩を傳つて堂に來た。二人の子も片手に下駄の緒を握り、片手を引かれながら小さな白い足に岩かどを踏んだ。如何にも恐ろしそうに足もとに氣をつけた。

「豐ちやん、去年こゝで西瓜を食つたこと覺ねてるかい」

と開くと悧巧な眼に思出の色を見せて、

「ねゝ覺ねてますよ、ほら仙次兄さんが西瓜の皮はたいしいといつて、だましたわ」

と小供心にもよく覺ねて居た。そして豊ちやんはドヴドウツと音のする岩のきつぱしに行つた。瀧一も行つて見た、芳ちやんも來た。波は岩の根もゆるぐかと思はれる程ドウツとぶつかつてはパツと白い泡を飛ばして居る。

豊ちやんは小さな胸に恐怖を感じたのであらう、すぐ後に退いた。そして不安らしい顔に瀧一を見た。もうむじ〳〵してる。

あゝ何か買つて來るとよかつた。小供はどうしてもお菓子でないと治まらない。と瀧一は今更氣のつかなかつたのを悔ゐた。彼はも少しこの岩の上で回想したかつたのである、坐禪でもして見たいなとも思つた、さわがしい世の中に揉まれて考へも出來ずにめくら滅法に駈けまはるのは彼の泳へきる所ではなかつた。

去年はこゝで笑ひ興じて、ねはじきなんかして居た房子さんは今年はもう冷い土に包まれてしまつた。變れば變るものである。たつた一年間の出來事である。

東都の春を尙寒いと火鉢にかじりついて居た頃一封の悲報は瀧一の胸をねぐつた。

報知は房子の死。知らせたのは義叔父であつた。瀧一の頭にはしかし血の氣の好い、ふつくりしたあの顔だちの外には何も思ひ浮べる事が出來なかつた。瀧一は夢ではないかと疑つても見た。

しかし全く事實であつた。仙次君から細々と樣子を書いた手紙が屆いた時、瀧一は知己を失つた心地がして何度もその手紙をくりかへした。

房子は瀧一の許嫁であつた。

瀧一の身体は舊に增して壯健になつたが、天は二物を與へず、その代りとして精神上に大打擊を與へた。瀧一の心には人生は只砂漠である、水氣もなければ美しさもない。又自分でももう何も望んで居ないのかも知れぬ。只ずん〳〵押しやられて仕方なしに流るゝまゝに流されて居るのである。それでも實父の酒に醉ふた顏で意見されたり、繼母の餘所々々しい素振を見たりすると、「何だ、人生は又とないぞ、人生の强者となれ」と反撥心を起して部屋に入つて机を叩く事もあつた。今度も東京から歸るとすぐに叔母の家に來てしまつたのである。

年取つた父とは流石に話したかつた。しかし繼母から「東京はた金のかゝる所だねね」と歸宅早々あびせられてはもうどうしても居る氣になれなかつたのである。

房さんはもう居ない。小さな墓が殘るだけで人の記憶からは次第に消ゑて行くであろう。そうして妙に瀧一その人の記憶からもだん〳〵薄れてゆく。今こそこゝに立つて思ひ出してるが、もうこの地を去つたら間もなく忘れることであらう。勝手なやうでもこれがあたり前の事かも知れぬ。

しかし今はそれが何となく房さんに濟まぬやうな氣がしてならない。せめて房さんの二重眼蓋のパッチリした眼は豐かな頰と共に、この堂の內に封じこんで置きたい。來年の夏も再來年の夏もこゝで永久にあどない房さんの面影を偲ばう。年若うして死ぬほど悲慘な事はない。

瀧一がかう思つてる間にだん〳〵暮れた。

「兄さん歸りませう、暗くなつてよ」

と豐ちやんが言ふ。

芳ちやんは瀧一の左の手を握つて、前後にぶら〳〵振り動かして歸らう〳〵とせめる。暗いとこはいかねと言はれて、二人とも恐ろしい話でも思ひ出したかキャッと言つてすがりついた。

「房ちんは永久に死んでしまつた」

と瀧一は心にくり返へしながら二人の手を引いて岩を下りた。浪の音はドゞドウッと寄せてはスーッと引いてゆく。その都度白い泡が岸に殘つては次第に消うる。空は紺青に暮れてキラ〳〵と星が二つ三つ。瀧一は小供の手をとつて、とぼ〳〵と泡近い砂を踏んだ。

俳句

紫溟吟社句錄

若葉

皷岩絞め緒蔓(カツラ)も若葉して　此君子

若葉すや出水名殘木川裾に　仝

一山の若葉統ぶ宮鉾の杉　仝

寺見ゆるま一ト上りや峯若葉　水郷

道程も桝目數へや里若葉　仝

洪水(ミズ)ありてより温泉荒れを若葉せり　青淪

自然枯れ名殘り若葉も瘤を出す　仝

玉磨ぐも日馴れ仕事や若葉風　痩脚

染め絲の日に燒けようや若葉風　仝

沙漠來て水得し思ふ若葉風　岳童

明けて眼に鳴戸隔てや島若葉　虛割

寺の構圖に朱して仰ぐや峯若葉　唐辛紅

落葉木は立てぬ掟や城若葉　八洲郎